©日本記者クラブ 2022

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/



未来へ、開く

三陸沿岸道路の全線開通を祝い、車両を見送る=2021年12月18日、岩手県久慈市　　撮影：住吉　健也（時事通信社仙台支社）

復活会見に生まれいずる悩み 解決する方法はただ一つ

謹賀新年。本年もよろしくお願いします。

記者を会場に入れる記者会見を再開して3カ月が過ぎた。がらんとしていた会場に記者が戻ったときは、それだけで顔の筋肉の緩む思いがした。元々、締まりのないたちだけど。落ち着いた感染状況の中、会場に来てくれるのは2割、オンラインが8割といったところで会見は推移してきた。ゲストの手前、もっと多くの記者が会場にいてほしいと願う。会場参加が少ないと「すみません、みんなリモートに慣れてなかなか来てくれなくて」と言い訳する。半面、どこにいても参加できるオンライン会見という手段を、会員には目いっぱい使ってほしいとも思う。

欲深いものだなあ。人間はいかなるものにも慣れる動物だとはいうものの、この緊張と緩和の波の繰り返しの、どこに慣れたらいいのか戸惑ってしまう。とはいえ、慣れの先に驚きが待っていることもある。いつものアラスカで昼食を注文し、「すみません、きょうは売り切れてしまいました」と言われたことが、くだんの記者会見の復活からしばらくしてあった。食べ物を注文して「ない」と言われ、うれしさがこみ上げた。生まれてこのかた記憶にない感慨に、客の戻った店内を見まわした。

さて、どんな年になるのだろう。会場に記者を、オンラインの活用を、との強欲を満たす方法は一つしかない。圧倒的な数の参加者を。大谷翔平さんの時のように明るいニュースで集められたら、と切に願う。

（専務理事　江木慎吾）

「言葉」を立て直し、取り戻す年に

理事長　根本　清樹

言葉を商売道具にしている身として、時に「言葉ってなんだ」という大きすぎる問いとたわむれることがある。もとより答えが見つかるわけではない。

■正気でいられるゆえん

雑読で仕入れた一説に、人間が正気でいられるのは言葉があるからこそ、というのがある。

ある瞬間に人間が受け取る入力は膨大であり、そのほとんどは認識されず、記憶もされずに消えていく。この状態を、脳科学者の茂木健一郎さんは「源泉かけ流し」にたとえる。

ここに言葉の働きどころがあるらしい。精神科医の中井久夫さんによれば、言語には「減圧」作用がある。いわく、「私の感覚と記憶のすべてが全開となれば、私は端的に壊れるであろう。そうでないように護っているものは言語の一次元性かもしれない」(『アリアドネからの糸』)。

これに近いことを批評家の小林秀雄が書いているのを、最近教えられた。「心の動揺」「得体の知れない不安」は、「言葉によって、限定され、具体化され、客観化されなければ、自分はどんな感情を抱いているのか、知る事も感ずる事も出来ない」(『本居宣長』)。

人間が正気でいられる。壊れずにいられる。それが言葉の仕事なのだという説は魅力的である。

それでは、人間ではなく、言葉の方が失調し、壊れてしまったらどうなるのか。ここしばらくの日本政治を振り返れば、言葉が「失調させられ、壊されてしまった」と、受動態に言い換えるべきか。

とりわけ政権与党による言葉の粗略な取り扱いぶりは、すでに語られ尽くした感がある。首相(当時)の国会での答弁を一つだけ、思い出しておく。

「私はですね、幅広く募っているという認識でございまして、募集しているという認識ではなかったのであります」

言論の府でまともな議論が成り立たない状況を、2022年はなんとかしなければならないだろう。

昨年、「聞く力」を掲げる首相が登場し、野党第1党の顔も新たになった。今年問われるのは、政治の言葉を立て直し、鍛え直すことができるかどうかである。

■損なわれた無駄話の力

「『言葉の壊れ』を悔しがる」

こう書き出される本が昨年出て、読者を得ている。障害者文化論と日本近現代文学を専門とする荒井裕樹さんの『まとまらない言葉を生きる』だ。

荒井さんが俎上に載せるのは政治の言葉に限らない。日々の生活の場で、例えばSNS上で、「負の力に満ち満ちた言葉」や「人の心を削る言葉」が飛び交っている。壊されているのは、言葉の「魂」「尊さ」「優しさ」……要は「短い言葉では説明しにくい言葉の力」だと、荒井さんは書く。

「言葉の力」といえば、一昨年来のコロナ禍が、ある種の言葉の力を損なったことに思い至る。雑談の言葉、無駄話の言葉である。

会社の会議はリモートで済ませても、すれ違いざまの立ち話で思わぬヒントをもらうというような機会が減った。ヒントはなくても、どうでもいい言葉のやりとりが気分転換になることもある。

法哲学者の谷口功一さんは、かつてネオン街のスナックについて「本邦初の学術的研究」を試み、『日本の夜の公共圏』という書物を編んだ。コロナ禍が全国の酒場に大打撃を与えたことで明らかになったのは、そうした場で「特に意味のない話をすることの重要性」だと、谷口さんは語っている(「望星」21年12月号)。卓見だと思う。

流行が収束し、こちらの言葉も取り戻せる年になることを願う。

(ねもと・せいき　朝日新聞社役員待遇論説主幹)



自民党総裁選立候補者討論会の冒頭、主催者代表としてあいさつする根本清樹理事長(2021年9月18日／10階ホール)

発言部分の事前のチェック

当然という思いと一抹の不安と

だいぶ前に、さる高名な文人に取材して、その人の発言をまとめた部分だけを、記事になる前に確認のためファクスで送ったことがあった。送り返されてきたファクスには「よくまとめてあり、何もない」という趣旨の手書きのコメントが付されていた。ところが、しばらくして「少し気になって」と何カ所かの修正が送られてきた。しばらくすると今度は「いやあ、一カ所直すと気になってしまって」と、ほぼ全文をリライトする直しがきた。

新年早々、昔話を書いたのは、昨年10月末にあった当クラブの記者会見の折の質疑が引っかかっているからだ。メディアとの関係について質問された医療の専門家が、記者から十数年前に取材を受けた際、発言部分を記事にするときはチェックさせてほしいと言ったところ、「そんなことはしていない」と叱られたと話した。専門家は「どんな風に書かれるかわからないのなら、答えられない」と返し、残念なやりとりになったという。いまはそういうことはなくなり、不安なく説明できるようになった、とメディア側の姿勢の変化についても言及した。

発言を正確に伝えてくれるだろうかと専門家が気にするのは当然だし、取材に誤解が入り込むことはままある。それでも、発言部分を事前に見せるかどうかはこれまで微妙な問題であり続けてきたように思う。記憶をたぐると「とんでもない」というデスクもいたし、「本人に送って了解をとっておいて」と軽く言うデスクもいた。取材内容や状況によっても対応は異なるだろう。

引っかかるのは、取材の、引き出した言葉を記事にすることの、厳しさへの影響だ。昔は「一言一句直すな」というデスク泣かせの困った記者がいたが、その頑なさは取材相手の言葉に対するものすごい執着でもあった。その執着こそがメディアへの信頼を築いてきたのだろう。単なる伝達手段を超える何かが言葉にあるのなら、発せられた言葉がまとっていたその何かは、後で直されることによってどうなってしまうのかとも考えてしまう。冒頭に挙げた例の場合は、こちらのまとめよりさすがに上出来でぐうの音も出ず、自分の力不足を痛感したが、力を込めて引き出したつもりの相手の反応がどこかに消えてしまったようで、むなしさが残った。

記事化の前に見せるということが、相手に向き合う記者側の迫力に、語られた言葉の重みに、影響を与えなければいいのだけれど。相手のチェックによってこそ記事の信頼性が担保されるのなら、記者の取材って何なんだろうという疑問も浮かぶ。記者ではなくなった今にして、難しい問題だと思う。（江木）

予想アンケート同封しました

今年をうらなう恒例の予想アンケートを同封しました。企画委員がそれぞれの専門以外の分野の設問を提案、年末の企画委員会で議論し、まとめました。ほとんどが二者択一になっています。簡単すぎても、難しすぎても結果の表彰に苦労しますし、結果が年の早い時期にわかってしまうのも興ざめです。そのあたり、設問作成側の腕のみせどころでしょうか。気軽に楽しめる内容になっていますので、ぜひ今年をうらなってみてください。

目次

▼新年にあたって　理事長　根本清樹　2
▼新春随想　読売新聞社　橋本五郎　4、5
▼クラブゲスト　阿部信泰 元外交官、元国連事務次長／青木健太 中東調査会研究員／斎藤明日美 一般社団法人Waffle共同代表／金明中 ニッセイ基礎研究所主任研究員／下斗米伸夫 法政大学名誉教授　6
▼会見リポート　マティアス・コーマン OECD事務総長／林香里 東京大学理事・副学長／フィリップ・セトン 駐日フランス大使、ジャン＝マチュー・レイ フランス海軍少将／サーブル・エシムベコフ 駐日カザフスタン大使／山野井泰史 ピオレドール生涯功労賞受賞者／ギラッド・コーヘン 駐日イスラエル大使／小林鷹之 経済安全保障担当相　7、10
▼土曜記者ゼミ　10
▼ワーキングプレス　日大・田中理事長逮捕　朝日新聞社　久木良太　みずほ銀行、業務改善命令　日本経済新聞社　亀井勝司　日本ハム 新庄監督就任　北海道新聞社　花城潤　11、13
▼新・列島報告 徳島県　半田病院ランサムウエア攻撃　徳島新聞社　石崎義典　14
▼リレーエッセー　連合福岡ユニオン・志水輝美さん　西日本新聞社　竹次稔　15
▼マイBOOKマイPR　16
▼写真回廊　18

記者の「一本道」、とぼとぼと

橋本　五郎
（読売新聞社特別編集委員）

あかあかと一本の道とほりたり
　たまきはる我が命なりけり

斎藤茂吉の歌です。茂吉は『童馬漫語』で自解しています。

「秋の一日代々木の原を見わたすと、遠く遠く一本の道が見えてゐる。赤い太陽が團々として轉がると一ぽん道を照りつけた。僕らはこの一ぽん道を歩まねばならぬ。このやうな心を出来るだけ単純に一本調子に直線的に端的に表現しようと思ったのである」

◆出発点は中2、ケネディ演説

社会学者の先生から「聞き書き」の申し出があり、大学1年からつけている日記を頼りにこれまでの歩みをたどり、どう終着すべきかを考えています。そこで浮かんだのが茂吉の歌でした。山あり谷ありのジグザグの道でしたが、それなりに新聞記者として一本の道をとぼとぼと歩いてきたという感慨があります。

新聞記者になりたいと思ったのは中学2年の時でした。アメリカで43歳の若き大統領が登場しました。「松明は若い世代に引き継がれた」「アメリカ国民の皆さん、皆さんは国が皆さんのために何を為しうるかを問い給うな。皆さんが国の為に何を為しうるかを問い給え」というケネディの大統領就任演説は田舎の中学生にも衝撃的でした。

そのケネディが最も信頼し、フルシチョフ・ソ連首相との会談内容を打ち明けたのがニューヨーク・タイムズ紙のジェームズ・レストン記者だったという記事を読みました。新聞記者はすごいと思いました。やがてベトナム戦争が激しくなりました。「ベトナムに和平を」と内外の多くの記者が健筆を振るっているのを見て憧れが強くなりました。

しかし、新聞社に合格しても不安がありました。自分に向いていないのではないか、新聞記者という仕事に耐えられず、辞めたいと思う時があるのではないか。その時のためにも、なぜ他の職業ではなく新聞記者を選んだのか、自分の中で確認しておこうと思いました。

その第一は、記者の役割はこの世の「なぜ」に答えることではないのか。なぜ戦争は起きるのか。なぜ人は人を殺すのか。物事がなぜそのように決まったのか。さまざまな疑問に答える素材を提供することだと思ったのです。第二は、不遜な言い方ですが、自ら主張する術を持たない人の代弁をするのが大事な役割ではないのかと思いました。

社会人になるにあたって母に三つのことを言われました。一つ目は何事にも手を抜いてはならない。常に全力であたれ。二つ目は傲慢になってはいけない。常に謙虚であれ。三つ目は誰も嫌いになることはない。嫌だなあと思ったら、その人の中に自分よりも優れているものがあるかを見よ。必ずあるものだ。そうすればもう嫌いになることはないよ。

この三つの教えと、秋田高校時代の鈴木健次郎校長先生の教えが記者生活の支えになりました。先生は赴任して早々生徒たちに訴えました。「諸君はいつ、どこで、誰にこう問われても直ちに断言できる人間になりなさい。それは『汝、何のためにそこにありや』です」。この問いにはとても重いものがあります。

◆「常に勉強を怠るな」の戒め

こうして記者として地方支局の生活が始まりました。胸に刻んだのが大学の恩師堀江湛先生の言葉です。「どんな職業に就こうが、常に勉強を怠ってはならない」。それは事あるごとに遠雷のように響いてきました。新入社員の研修会で毎年決まって言うことがあります。

「私たちの仕事は、その人が20年も30年も一筋でやってきたことをわずか数日の取材で断罪する傲慢な仕

事です。それが宿命だけに、その人の20年分を追体験するぐらいでなければなりません。一刻の安息も許されないのです」。それはまた自らへの戒めでもあります。

　これまでの記者人生の中でいくつかの分岐点がありました。編集局次長になって間もなく、社長に「テレビに出てくれないか」と言われました。新聞記者として全うしようと思っていましたが、半ば業務命令です。渋々始めることになりましたが、今になってとても感謝しています。

　政治部長時代、「わかりやすく、ためになって、おもしろい」政治面をつくろうと部員に呼びかけました。テレビの場合はもっとわかりやすくなくてはいけません。最初に何を言うか、「つかみ」も大事です。この点では新聞記事もまったく同じです。

　第二の分岐点は胃がんで胃の全摘手術をしたことです。お医者さんや看護師さんにどんなに感謝しても感謝し切れません。主治医の済生会中央病院の大山廉平（れんぺい）先生に言われました。「どれぐらい生きられるかはわかりませんが、一日一日を大切に生きてください。無事1年過ぎたら1年生の修了証を差し上げましょう。2年が過ぎたら2年生の修了証を差し上げましょう」。そう言われて21年の歳月が過ぎました。



はしもと・ごろう▼1946年秋田県生まれ　70年読売新聞社入社　76年から政治部　論説委員　政治部長　編集局次長などを務め　2006年から現職　読売新聞で「五郎ワールド」を連載中　書評委員も20年以上にわたって担当　日本テレビ「スッキリ」　読売テレビ「情報ライブミヤネ屋」「ウェークアップ」などにレギュラー出演　14年度日本記者クラブ賞受賞　著書に『範は歴史にあり』『宿命に生き運命に挑む』『総理の器量』『新聞の力』など多数

◆24人の総理を身近に見て

　政治記者として三木武夫以来24人の総理大臣を身近に見てきました。多くのことを学びました。「政治とは鎮魂である」が政治信条だった大平正芳は「権力は奉仕する目的に必要な限り、その存在が許されるものである」という謙抑的政治観の持ち主でした。そこに「韜晦（とうかい）の政治」の姿を見ました。

　福田赳夫は「清貧の政治」で貫かれていました。掲げる政策と自らの日常生活にこれほど齟齬のない政治家は珍しいと思いました。それゆえに激しい権力闘争の世界ではなかなか勝者になり得なかったのかもしれません。『評伝　福田赳夫』を読めばそれがよくわかります。

　中曽根康弘は国家を背負った「王道の政治」を追求しました。権力の持つ魔性を自覚しながら、「政治家とは歴史という名の法廷で裁かれる被告である」と自らを歴史の中で相対化することを忘れませんでした。101歳で亡くなるまで休みなく勉強し続けた「生涯一書生」でした。

◆ジャーナリストに必要な要件

　ジャーナリストに必要な要件とは何だろうと考えてきました。百人百様でしょうが、私は三つのことを思ってきました。第一は「健全な相対主義」です。政治の世界では特にそうですが、一方が100％正しくて一方が全く間違っているなどということはあり得ません。せいぜい49対51です。だから少数と思われる意見にも耳を傾ける必要があります。

　第二は「適度の懐疑心」です。自分は間違っているのではないかという自分を疑う気持ちです。どんなに取材しようが、それは事実の一部でしかないという一種の諦念がなければいけないと思うのです。ですから慎重にならざるを得ないのです。

　第三は、「鳥の目」と「虫の目」です。長い歴史と広い空間の中で今をとらえる大きな視点と、人々の喜び悲しみを大切にするミクロの視点を同時に持たなければいけないと思うのです。

　そのためには古典を読むことがいかに大事かということを痛感しています。2500年前の『論語』は全く古びていません。2400年前の『ソクラテスの弁明』は今の姿を照射しています。マキアヴェリの『君主論』は政治の本質を突いています。わずか数百円の文庫本で歴史の英知を学ぶことができるのです。

　文芸評論家の江藤淳さんは慶應大学の最終講義で、大学に入ったら肩で息するぐらい勉強したいと思ったと話しました。膝を打ちたいほど心から同感しました。

　私たちの生には限りがあります。であれば、悔いなく全力を尽くすしかありません。極めて個人的な感傷を綴ってしまったことをお許しいただきたいと思います。

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートはウェブサイトで読めます。
出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数。

阿部 信泰（あべ のぶやす）さん 元外交官、元国連事務次長



米国のアフガニスタン撤退は同盟国に「米国は守ってくれるのか」と動揺を与えた。「日本は現実的には日米同盟で自由・民主主義・基本的人権の尊重という基本理念を守るしかない。自主防衛を強化し経済力を維持し、米国に日本は守る価値ありと思わせることが大事」

■12・6／出席：会18人、オ38人／「アフガニスタン」⑥／司会：杉田弘毅委員

青木 健太（あおき けんた）さん 中東調査会研究員



アフガニスタンの現状について「タリバンの権力独占は続く」と解説。「和解には多民族を包摂する政権誕生が不可欠だが、これは未完のプロジェクトだ」「日本は人道援助のほか農村での自立した生活を支えるために、農業・牧畜分野で中長期的支援を行うべき」

■12・10／出席：会38人、オ10人／「アフガニスタン」⑦／司会：出川展恒委員

斎藤 明日美（さいとう あすみ）さん 一般社団法人Waffle共同代表



IT分野のジェンダーギャップ是正へ、女子中高生向けのIT教育や政策提言を行う。「日本の工学部の女子比率は世界109位。中高生段階のジェンダーバイアスが理系女子を阻む」。理系キャリアを可視化するとともに、女子学生を増やす大学入試改革の必要性を訴えた。

■12・15／出席：会9人、オ31人／「ジェンダーと教育・研究」③／司会：早川由紀美委員

Kim Myoung-Jung 金明中さん ニッセイ基礎研究所主任研究員



韓国大統領選の主な候補者、李在明氏と尹錫悦氏の立ち位置について経済、労働、男女対立、世代間格差などから分析。格差の拡大によって世代間の葛藤が広がっていると指摘、「特に20代、30代の浮動票が多い。若者をターゲットにした政策がポイントになる」とした。

■12・20／出席：会16人、オ42人／「韓国大統領選を読む」②／司会：五味洋治委員

下斗米 伸夫（しもとまい のぶお）さん 法政大学名誉教授



ソ連崩壊から現政権に至る流れを、ロシア正教会に異端とされた「古儀式派」の動きで読み解いた。ロシアを優先する同派の末裔がエリツィン元大統領だという。ソ連崩壊による自由を評価しつつ、「中産階級が没落し、いかがわしい勢力が経済を牛耳るようになった」。

■12・22／出席：会32人、オ40人／「ソ連崩壊30年」①／司会：杉田弘毅委員

＊下記のゲストの会見リポートは7～10ページに掲載しています

Mathias Cormann（マティアス コーマン）さん 経済協力開発機構（OECD）事務総長（リモート登壇）

■12・3／出席：オ84人／司会：小竹洋之委員／通訳：西村好美さん、宇尾眞理子さん

林 香里（はやし かおり）さん 東京大学理事・副学長

■12・8／出席：会18人、オ55人／「ジェンダーと教育・研究」②／司会：辻本浩子委員

Philippe Setton（フィリップ セトン）さん 駐日フランス大使
Jean-Mathieu Rey（ジャン マチュー レイ）さん フランス海軍少将、太平洋海洋管区司令官（リモート登壇）

■12・13／出席：会13人、オ43人／司会：大内佐紀委員／通訳：三宅薫子さん、尾崎直子さん（いずれも駐日仏大使館）

Sabr S. Yessimbekov（サーブル エシムベコフ）さん 駐日カザフスタン大使

■12・16／出席：会18人、オ31人／司会：出川展恒委員

山野井 泰史（やまのい やすし）さん ピオレドール生涯功労賞受賞者

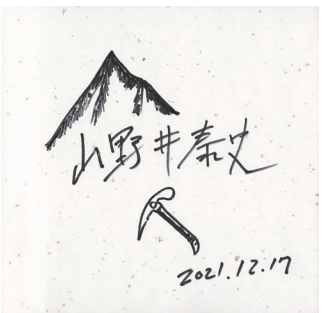
■12・17／出席：会20人、オ33人／司会：元村有希子委員、近藤幸夫 朝日新聞長野総局山岳専門記者、萩原浩司 山と渓谷社取締役（山岳出版本部本部長）

Gilad Cohen（ギラッド コーヘン）さん 駐日イスラエル大使

■12・21／出席：会20人、オ37人／司会：出川展恒委員／通訳：池田薫さん

小林 鷹之（こばやし たかゆき）さん 経済安全保障担当相

■12・22／出席：会41人、オ71人／司会：佐藤千矢子委員



●揮ごうは山とピッケル

登山界で最高の栄誉といわれる「ピオレドール生涯功労賞」の13人目の受賞者となった山野井泰史さん。沢木耕太郎さんのノンフィクション『凍』などで有名だが、昨年末にビッグコミック誌でも山野井さんを主人公にした連載が始まった。

会見前、控室でゲストブックに山とピッケルの絵（写真）を描いてくれた。

マティアス・コーマン
経済協力開発機構（OECD）事務総長
12月3日

財政の持続可能性、どう確保



コーマンOECD事務総長の会見はパリからのオンライン開催となった。前職がオーストラリア予算大臣のコーマン氏の就任は昨年6月で、初の日本記者クラブ会見に国内外のメディアが数多く参加した。

まず対日経済審査報告書のポイントを約10分で解説した。コロナ禍への日本政府の対応を評価し、特にワクチン接種率が高いため経済への打撃を抑えられると指摘。2021年の成長率は1・8％に回復するとの予測の背景を説明した。

課題は4点挙げた。まず長期的な財政の持続可能性をどう確保するか。公的債務の対国内総生産（GDP）比率が2019年の223％から244％に上がると警鐘を鳴らし、経済が回復軌道に乗った後は財政健全化に取り組むよう促した。2つ目は生産性の向上と労働供給の拡大で、女性の労働参加へ働き方改革を強調した。

3つ目は環境問題への対応。化石燃料依存の脱却へ投資支援措置が必要と指摘した。4つ目はデジタルトランスフォーメーション（DX）の進展で、行政サービスのデジタル化は生産性の向上と財政健全化にも資すると強調した。

時間の半分以上を充てた質疑応答ではバランスに配慮する姿勢が印象的だった。「世界的なインフレ圧力のなか、なぜ日本は低インフレか」との質問には「輸入価格上昇などの影響は今後出るが、企業がかなり吸収する」と指摘したうえで「今後注視していく」と補った。

「包摂的な成長戦略に何が必要か」には「正規と非正規の賃金格差などの壁をなくすこと」と強調し、非正規で働く高齢者のスキル再教育への支援を一例に挙げた。「岸田首相が就任前に10年は消費税を上げないと述べたが、どう思うか」と聞かれると「財政健全化の取り組みは歳入と歳出の両面があり、各国がそれぞれの状況に応じて最適な組み合わせを考える」と答えた。

日本経済新聞社編集委員　吉田　ありさ

「ジェンダーと教育・研究」②

林　香里
東京大学理事、副学長
12月8日

「逆差別」がまとう誤認識



「日本人、関東出身、私立男子校卒」。昨年4月、東京大学理事・副学長に就任し、学内のダイバーシティー実現に取り組む林香里さんが分析する「東大生」の構図だ。女性の学生数は2割（教授は1割）にとどまり、同質性の高い集団で「東大の学生は多様性が低い」と断じた。その上で「東大だけではなく、現在の日本の傾向と合致しているのではないか」と問題提起した。

欧米でも傾向は同様だが、日本は多様性への認識が薄く、制度的な努力が手薄だという。「日本こそどの国よりも女性を支援しなければ、学問上のフェアな競争さえできない」。家事や育児の大部分を女性が担っている現状がありながら、女性に対する支援措置には「逆差別」という言葉が今も飛び交う。「逆差別という言葉には、出発点が無色透明、中立公正という誤った認識がある」と、いびつな社会構造にこそ目を向けるべきだと指摘した。

東大では、女性教員を採用した研究室に人件費を助成したり、午後9時まで子どもを預けられる保育園を学内に設置。出産、育児や介護に必要な費用を補助する両立支援には、男性からの申請が女性を上回り、理解の浸透に手応えも感じている。東大憲章にLGBTQなど性的少数者への配慮を盛り込むことも検討中だ。

教員の採用などで、一定数を女性に割り当てるクオータ制の導入については、重要性は認識しながらも慎重な立場を取る。「多様性が学問のレベルを上げ、個人の職業の自由を保障する、という同じテーブルに着ける状況にまだない。現状認識を共有することから始めたい」と語った。

メディアが社会の不平等さに目を向けるべきだと指摘した。日本のジェンダー差別は深刻で、コロナ禍は女性を取り巻く環境をより厳しくした。政治も経済も、社会全体を通じてジェンダーの視点が必要だ。「長い期間をかけて認識を集め、合意を取り、伸ばしていかなければならない」。林さんの言葉をかみしめている。

東京新聞政治部　柚木　まり

フィリップ・セトン
駐日フランス大使
ジャン＝マチュー・レイ
フランス海軍少将、太平洋海洋管区司令官
12月13日

日印との安保連携を強化へ





フランスの識者と国際政治について話をしていると、しばしば「アングロサクソン」というくくり方を耳にする。「米英」や、時には「英語圏の国」を指す。友好的な文脈では、あまり使われない。そのことを、フィリップ・セトン駐日フランス大使とフランス海軍のジャン＝マチュー・レイ少将の記者会見で思い出した。

昨年9月、フランスはオーストラリアと結んでいた潜水艦共同開発計画を一方的に破棄された。米英両国がオーストラリアの原子力潜水艦導入を支援し、さらに米英豪3カ国は安全保障枠組み「AUKUS（オーカス）」を創設。マクロン大統領は駐米、駐豪両大使を一時召還し、3カ国との関係は冷え込んだ。

セトン大使は会見で、オーカス創設について「フランスや欧州連合（EU）の、インド太平洋地域における利害関係をすべて無視している」と批判した。米国とは対話の継続に合意したが、「対オーストラリアでは、関係改善で具体的なことは何も決まっていない」とも述べた。

その上で「フランスはインド太平洋地域で（他に）多くのパートナー国に恵まれている。日本やインド、東南アジア諸国との関係を深める」と付け加えた。日本とは、軍の共同訓練で相手国への一時滞在の法的地位を定めた円滑化協定（RAA）締結に言及。インド太平洋戦略の要の一つと見込んでいたオーストラリアとは一線を画し、日印などとの連携強化に活路を見いだす意図を明確にした。

大使は「オーカスはアングロサクソン系と言われる。だが、（第1次大戦中の）1917年には、われわれも米英豪の側で戦っていたことを忘れるべきではない。同盟が排他的でないことを望む」とくぎを刺した。

フランスはインド太平洋地域に海外県・領土があり、国民160万人が住んでいる。ニューカレドニアなどに駐留する兵力は約7000人で、欧州ではこの地域に軍を常駐させる唯一の国となっている。

共同通信社編集委員　軍司　泰史

サーブル・エシムベコフ
駐日カザフスタン大使
12月16日

対中ロ、核禁外交に独自の道



サーブル・エシムベコフ大使は、新たな独立国カザフスタンと日本の関係を築いた草分けで、知日派の代表である。留学生だった1994年、ナザルバエフ大統領の命で在日カザフスタン大使館の開設に奔走した。連邦崩壊時は27歳、ソビエト末期に高等教育を受けたこの世代が、連邦崩壊後の国造りの中核を担うことになった。

会見当日はカザフスタン独立30年。「独立の最初の数年間は非常に苦しい時でした。経済が完全に停滞する中、課題は、市場経済を構築し、全体主義体制を解体して、社会の全ての制度を近代化することでした」

資源豊かなカザフスタンは、ユーラシア大陸の中心に位置し、北にロシア、東は中国に挟まれている。大使はモスクワで学び、ロシアの外交・ビジネスに広い人脈を持つ。中国とはパイプライン敷設交渉の責任者を務め、中国の出方も肌感覚で知っている。「中ロとの関係は良くて、上手い外交政策が行われている。世界はカザフスタンの経験に学ぶことができるのではないか」。中ロとの関係が死活的な意味を持つだけに、米ロ、米中の対立が深まる中で、発言は慎重だ。

ただカザフスタンは平和国家として独自の外交を進めている。その一つは核実験に苦しんだ体験から、核兵器禁止への積極的な参加だ。「我々の目標は核兵器のない世界を実現することです。（今年）カザフスタンで核軍縮国際サミットを開催する予定です。私たちは日本人とともに核の被害とその悪影響について身をもって知っている人間です」。カザフスタンは中央アジア非核地帯条約と核兵器禁止条約の批准国である。カザフスタン主催の核軍縮国際サミットに日本が参加するのか注目されるだろう。

大使は親しみやすい笑顔から「サブロー」、あるいは「サブちゃん」と呼ばれ、日本にも友人が多い。日本とカザフスタンが戦略的パートナーシップを確立できるか、「サブロー」大使への期待は大きい。

NHK解説委員　石川　一洋

山野井　泰史

ピオレドール生涯功労賞受賞者

しなやかで強靭な知性

12月17日



「ピオレドール生涯功労賞」は、並外れた登攀（とうはん）歴を有し後世代への模範になるようなクライマーだけに授与される。山野井さんの受賞も世界で13番目、アジアでは初めてだ。

山野井さんは「驚いたし名誉とも思った」と言いながら「喜んだかな？」と自問、むしろいつもの生活パターンが崩れることを心配した。ただ、自分に登山を教えてくれたオジが病床からラジオで聞いた、と電話をくれるなど周囲が喜んでくれたことで幸せな気分になった、という。

ことほどさよう、実に正直で飾らない人である。言葉数は多くないが、問いには実に的確に、かつ丁寧に答えてくれる。

なぜ単独行なのか、に対しては「山がより身近に感じられ、自然とダイレクトに触れ合える。大きな達成感を独り占めできる」。地球温暖化の影響については「頂上や稜線が鋭くなり歩きづらい。南米の氷河の後退が特に激しい」。日本の山の魅力については「谷は深いし山の天候はかなり厳しい。登攀能力を向上させる訓練の場となる」等々。

当方も2問聞かせていただいた。自分のどこが登攀の天才だと思うか。そして、死屍累々の世界でなぜ毎回生還できたのか。

「運動能力で言えばトップクラスに比べて心肺機能は7割、登攀技術は8割、精神的部分は9割しかない。だが、僕は計画を立てるのが上手だ。どう訓練し、どう登ったら死なずに帰ってこられるか、素早く計算できる。家での準備段階でイメージできるのが僕の強みだと思う」

「山に入った瞬間の集中力が高い。落石がどうか、天候はどうか、センサーを強力に働かせる。常に視線を広くし山のことしか頭に入れない。その差が生き残るのに重要だ」

身体だけではなく、実にしなやかで強靭な知性が感じられた。「天国に一番近い男」と言われながら、56歳の今まで数々の難所をくぐり抜けたクライマーの強みがそこにあった。

毎日新聞社客員編集委員　倉重　篤郎

ギラッド・コーヘン

駐日イスラエル大使

防衛協力・投資の促進を訴え

12月21日



新任大使として日イスラエル関係の強化を目指す意欲は鮮明だった。20枚ものスライドを使って両国間の外交史や協定、経済関係などを丁寧に説明し、投資・貿易の促進、防衛協力の拡大などを訴えた。

最後のスライドは「イスラエルのイメージ」と題し、近代的な高層ビルやビーチなどの写真を並べていた。「ニュースだけ見ていると、イスラエルといえば『紛争』『戦争』になってしまう。しかし、真の姿は全く違う。アンフェアだ」

会見場にいる記者たちを見ながらこう指摘するギラッド・コーヘン駐日大使の語気は強かった。

「ハイテク立国で安全な国、美しいビーチもあるが理解されていないと思う。紛争が起これば報道は当然だが、ぜひ伝える内容についてはもっとバランスをとってほしい」

パレスチナとの紛争をめぐる報道が絶えないイスラエル。そのイメージを変えたいと記者へ訴えることに躊躇（ちゅうちょ）は感じられなかった。イメージが改善されれば、観光客に加えて経済成長に欠かせない投資を呼び込みやすくなる。確かにそのメリットは大きい。

ただ、その「アンフェア」「バランス」と語る言葉には、和平の道筋を見いだせないパレスチナ問題やイランとの関係が見え隠れする。

パレスチナ自治区ガザを実効支配するイスラム組織ハマスとの武力衝突は地域の主要ニュースとなるが、和平に向けた経済支援などイスラエルの取り組みは「注目されない」との声が同政府関係者からは漏れる。また、イスラエルを敵視し核開発を進めるイランとの軍事衝突が懸念される中、大使は会見でバーレーンとの国交正常化などで中東情勢に変化が起きているとアピールする。

日本メディアとの対話や政府間協議でイスラエル側の主張や情報をどこまで伝えることができるか―。大使の手腕が問われることになる。

産経新聞社外信部専門職　坂本　一之

小林 鷹之 経済安全保障担当相

半導体、新たな市場が重要

12月22日



「米国や中国など他国の動きに右往左往しないようにするために、日本の基軸となる考えをしっかりと持ち、国力を高めなければいけない」

岸田文雄内閣が看板政策の一つに掲げる「経済安全保障」の担当大臣として、強い危機感を率直に語った。

経済安保は、米中対立の長期化やコロナ禍でサプライチェーン（供給網）の脆弱性が露呈したことなどを背景に、半導体をはじめとする重要物資の安定供給や機微技術の海外流出防止を目指す概念だ。現状では米国や中国が先行し、丸腰に近い状態にある日本は急ピッチで制度整備を進める。

各国は輸出や投資、国際共同開発などの規制を強化しており、日本も同様の流れになる見込み。経済活動の制約につながるため、企業には「規制対象となりうる機微技術の定義を明確にしてほしい」と配慮を求める声がある。これに対しては「リクエストに応じる形で制度を設計する」とする一方、「海外との違いを認識した上でビジネスをしないと虎の子の技術やデータが守り切れない」と理解を求めた。「経済安保の規制の側面ばかりクローズアップするのはミスリードにつながる」と一部マスメディアの報道姿勢に苦言も呈した。

政府主導で国内生産基盤の確保に乗り出した半導体については、「少なくとも10年はかかるが、半導体産業の再生は可能だ。今なら間に合う」との見方を示した。

日本の半導体産業は１９８０年代後半には世界シェア５割を占めていたが、今は１割弱まで低下している。復活には製造拠点の整備と併せて、半導体を多く使う新たな市場づくりを進めることが重要だとした上で「この先10年間でどれほど国がコミット（関与）するかで民間企業の本気度が変わる」と力を込めた。

大臣就任以降、地元を離れ東京で暮らす。「家族と会えないのは寂しいが、日本のために頑張りたい」

毎日新聞社経済部　三上　剛輝

調査報道⑦ 愛知県知事リコール署名偽造事件

12・18／講師 細井卓也 中日新聞名古屋本社編集局社会部県警キャップ／出席：会場３人、ネット37人

■多くの証言 物証で補強、裏取り

２０２１年度の新聞協会賞を受賞したスクープとそのキャンペーン報道の全体像だけでなく、苦労話や裏話なども今回の講義では担当者から聞くことができる。この絶好の機会に臨んだ参加者たちは、細井記者が語る言葉の細部も聞き漏らすまいと熱心に耳を傾けた。

今回の特報は、ブロック紙、２紙の連携が奏功して結実した大きな成果でもある。両社の垣根を越えた連携や報道も注目された。その内実や今後の課題など、示唆に富む話も聞くことができた。

この事案は報道が先行し、その後、警察当局が事件化したが、細井記者は「当局情報に頼らず、調査報道で書き切るという思いで日々取材した」と語った。全容解明の突破口となる複数の事件関係者に記者たちがいかにして迫り、迫真の証言を得たかのくだりは興味深いものだった。

一進一退が続く状況下でも、取材班の記者たちが続けていたのは、一人でも多くの関係者に取材して証言を積み重ねる一方、画像などの物証も集めるなどして証言を補強する裏取り作業の繰り返しだった。便利なツールや近道などがあったわけではない。この愚直な取材の継続こそが、調査報道の王道なのだと改めて気づかせてくれた。

朝日新聞社記者　砂押　博雄

土曜記者ゼミ

日本記者クラブ賞・同特別賞の募集締め切り間近

応募は１月31日（月）必着です。積極的な推薦をお待ちしております。

■日本記者クラブ賞

取材、報道、評論活動を通じて、ジャーナリストとして顕著な業績を挙げ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。会員または法人会員社に属する方々が対象です。個別のスクープではなく、最近数年間の業績を重視して選考します。クラブ会員であれば推薦できます。

■日本記者クラブ賞特別賞

原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰しますが、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。また外国人や故人も対象となります。クラブ会員だけでなく、日本新聞協会もしくは日本民間放送連盟の加盟社に属する方であればどなたでも推薦できます。

■応募方法

両賞とも、推薦書と推薦理由（2000字以内）を記入し、参考資料を添えて提出してください。推薦書は、クラブのウェブサイトからダウンロードできます。

詳細は事務局の村田（03-3503-2727）へお問い合わせください。

日大・田中理事長逮捕　久木　良太（朝日新聞社東京社会部司法キャップ）

100日余りの「頂上作戦」
自力でファクト掘り起こす

日大の田中英寿・前理事長が昨年12月、東京地検特捜部に脱税の罪で起訴された。9月の家宅捜索から100日余り続いた事件を振り返る。

「日大理事長宅を捜索　背任容疑の関係先」（9月9日付朝刊）。事件を伝える最初の記事だが、見出しには捜索令状の被疑者となった側近理事ではなく理事長を取った。自宅や理事長室の捜索から「本丸＝田中理事長」と強く感じたからだ。

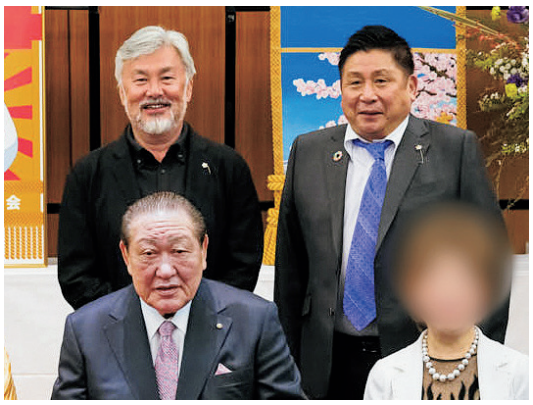
取材班には司法クラブの検察担当に調査報道班の記者を加え、国税担当の記者も組み入れた。まずは日大板橋病院の建て替えに伴い、数億円の日大資金が外部に流出したという背任容疑の解明が急務だった。

「検察リーク」という幻想

特捜部が長期間かけた捜査を短期間でキャッチアップするのは容易ではない。捜査機関ではない我々は銀行口座や携帯履歴の照会はできないし、重要な関係者は取材には応じないよう特捜部からクギを刺されている。さらに「検察リーク」という言葉は検察取材の経験がない人たちの幻想で、幹部らの口は極めて堅い。

こうした中で各社の記者は、真相にたどり着こうと知力と体力を振り絞る。特捜事件はいつもそうだ。

取材班は多くの関係者に接触し、拒否され、また接触するといった地道な作業を繰り返し、背任事件の構図のチャートを更新していった。「日大理事に2500万円還流か　病院工事　2・2億円流出疑い」（10月6日付朝刊）。捜索から約1カ月後、大阪市の医療法人や理事の知人が介在した複雑なスキームをチャート付きで報じた。この間の取材は、捜査の後追いにとどまらず、自力でファクトを掘り起こす調査報道的なアプローチだったと思う。


田中英寿・日大前理事長（前列左）と側近だった元理事ら（日大HPから）

この時点で取材班内のチャートでは、田中理事長への現金の矢印は点線で伸びていた。これが実線になるかがその後の取材の焦点となった。

理事らは翌7日に逮捕され、再逮捕もされた。我々の仕事は検察のみこしを担ぐことではなく、犯人視報道も避けなければならないが、アメフト部の悪質タックルの記憶も新しい「日大」「田中理事長」は大きなニュースであり、続報を重ねた。

現金受領「点線」が「実線」に

「『日大理事長側へ6千万円』供述　医療法人前理事長」（10月23日付朝刊）。点線が実線になったと判断し、理事長側への現金提供を時期、場所、金額と共に報じた。「理事長は『絶対ない』と言っている」。理事長周辺はそう伝えてきた。

日本一のマンモス校で起きた事件の本質を読者に提示することも心がけた。「日大ガバナンス不全　理事会は形骸化　『ちゃんこ屋詣で』は欠かさず」（11月8日付朝刊）では長期政権下での統治不全、大学出資会社を舞台にした他大学での不正、理事の選任・解任をめぐる私立学校法の改革議論を多角的に描いた。

「日大理事長、所得隠しか　計1億円超申告せず」（11月18日付朝刊）。田中理事長は背任罪の共犯としての立件は見送られたが、背任事件の病院工事に関連して業者が提供したリベートなど約1億2千万円の所得を隠した脱税容疑で同月29日に逮捕された。理事長を辞す一方で当初は受領を否定したが、妻が業者に「たくさん頂いてありがとう」とお礼を伝えた留守電を聞かされると、妻をかばうように容疑を認めた。

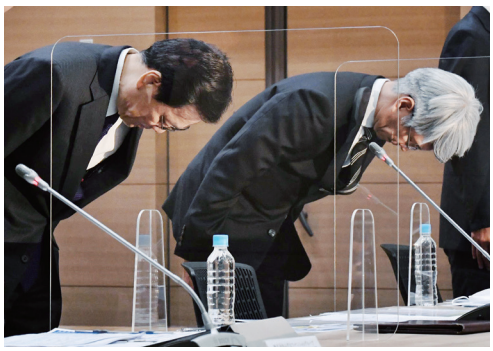
日大はトップ逮捕から11日後によやく会見を開き、前理事長との「永久決別」を誓った。大学院から幼稚園まで10万人超の学生を抱え、多額の補助金が投入されてきた日大が、自浄作用が働く組織に変われるのか。今後も注視していきたい。

きゅうき・りょうた▼2000年入社
名古屋報道センターなどを経て　東京社会部　特別報道部　政治部　再び東京社会部　20年9月から現職

「改革」のタマなく首脳総退陣
手詰まり金融庁、2度目で引導
みずほ銀行、業務改善命令

亀井　勝司（日本経済新聞社金融グループ次長）

みずほ銀行で起きた一連のシステム障害は首脳が責任をとって総退陣する事態に発展した。日本の決済システムの中核を担うメガバンクが昨年、8度も障害を繰り返したこと自体異常だが、システムを使いこなせていない以上、今後も障害が起きる懸念も拭えない。ほぼ10年おきに繰り返す失態の本質は、問題に正面から向き合わず、形だけ整えて済ませてきた姿勢だ。



金融庁から業務改善命令を受け、記者会見で頭を下げるみずほFGの坂井社長（左）とみずほ銀行の藤原頭取（2021年11月26日/都内/日本経済新聞社提供）

「みずほのATMが止まっているっぽいです。SNSで拡散しています」。2月28日の昼下がり。近所のショッピングセンター（SC）にいたところ、同僚記者から次々に連絡が入った。急いでSC1階にあるみずほ銀のATMに確かめにいくと「故障中」の紙が張られていた。

客に詰め寄られた記者

手分けして取材を進めると、ATMが止まっているだけでなくキャッシュカードや通帳を吸い込まれて店舗に足止めを食っている人が大量にいることが分かった。さいたま市内の店舗を訪ねた同僚記者は「あなた、みずほの人？　4時間も待たされているけど誰も来ない」と詰め寄られたといい、問題が長期化すると予感した。

監督当局である金融庁は当初、「長時間、待たされた人をセンセーショナルにテレビで流すから目立つけど、過去の障害と比べたマグニチュードは必ずしも大きくない」というスタンスだった。たしかに、数日間にわたってATMが止まり、給与の振り込みまで遅延した2011年の障害と比べれば影響の範囲は限られていた。

ただ、それからたった2週間で3度の障害が相次ぎ、因果関係も分からないという事態に陥る。金融庁はそのたびに報告徴求命令を出したが、複雑な銀行システムに精通した職員がいるわけでもなく、有効な手を打てずにいた。検査も長引いていった。

4月以降、障害は起きず、金融庁は8月下旬に「けじめ」となる業務改善命令を出す調整を進めていた。ところがその矢先、8月20日に5度目の障害が起きた。ハードディスクの故障で店頭での手続きが全面ストップした。さらに同23日には再び一部のATMが止まった。

行政文書と思えぬ文言

ある金融庁幹部は「処分後だったら目も当てられない」と本音を漏らしていた。もっとも、頻発するシステム障害になんら手を打っていないとみられるリスクを避けたい金融庁は検査中にもかかわらず9月22日、システム改修計画を再検証させ、不要不急と判断すれば改修や更新の延期を求める異例の業務改善命令を出した。

それでも障害はとまらず、命令後の9月30日にもトラブルが起きた。当初は「障害のたびにトップのクビを取っていたらいくらあっても足りない」としていた金融庁は11月26日、経営トップに事実上の引責辞任を迫る2度目の業務改善命令を出した。

「言うべきことを言わない。言われたことだけしかしない姿勢」。改善命令に書かれた行政文書とは思えない文言には、02年のみずほ発足以来、障害のたびに経営責任の明確化と再発防止策を求めながら、抜本的な改革につながらなかった後ろめたさがにじむ。

みずほは過去の障害や不祥事の際、金融庁が深く関与する形で1バンクや委員会等設置会社への移行を打ち出してきた。結果からみれば、こうした「改革」は再発防止につながらなかった。今回、みずほがFG社長らの総退陣という過去と比べて最も重い経営責任をとるのは、もはや耳目を引く改革のタマが残っていない裏返しでもある。

企業風土改革は地味で見出しになりにくいが、今度こそ目をそらさず、再発防止に向き合ってほしい。

かめい・かつじ▼2002年入社　札幌支社を経て東京経済部　名古屋支社から東京に戻り　民間金融機関　日銀　金融庁のキャップを経て21年4月から現職

日本ハム　新庄剛志監督

フィーバーの裏、情熱と見識
起死回生の一手、花開くか

花城　潤（北海道新聞社運動部）

就任前のイメージと就任後の言動とのギャップに驚いた。昨年11月、プロ野球北海道日本ハムの監督に就いたビッグボスこと新庄剛志氏（49）のことだ。

「新庄さんで大丈夫ですか？」。昨年10月中旬。球団の後任監督人事の裏取り取材を進めていた記者は思わず球団幹部に伝えた。バラエティー色が強い上、長い間、野球界から離れていたからだ。しかも新庄氏の現役時代を知る同僚記者からは直接取材する機会はほぼなく、試合後はコメントでの対応と聞いていた。取材する側として不安だった。しかし、就任会見を終え、その考えは消し飛んだ。

「ヒットなくても点取れる」

新庄監督の魅力は、言わずもがなの華やかな見た目と巧みな話術。そして派手な言動の裏側には、野球に対する情熱と深い見識があることを恥ずかしながら知った。就任会見では「選手兼監督で契約させてもらった」「（自分の）顔を変えずにチームを変える」と笑いを誘う一方で、「まずは作戦面。ヒットを打たなくても点は取れる」と堅実な野球を目指す考えも示した。新選手の契約合意のリリースに付けられたコメントも、それぞれの選手の特徴を把握した上で、チームにとってどう貢献できるのかが具体的に記されていた。記者として非常にありがたかった。



ファンフェスティバルにカウンタックに乗って登場する新庄監督（2021年11月30日/札幌ドーム/北海道新聞社提供）

北海道民は2006年の日本一に貢献した元スター選手の復帰を歓迎した。新庄監督がファンの前に初めて登場した札幌ドームでのファンフェスティバルには2万人の入場制限に迫る約1万8千人が集結。この様子を道内限定の地上波で独占生中継したフジ系列の北海道文化放送（UHB）は新庄監督の出演シーンで世帯最高視聴率19・8％を記録した。UHBの担当者は「想像をはるかに超えた新庄人気。会社の上層部は新庄さんを番組に出せと浮足立っている」と言う。チームの成績低迷とともに年々減ってきた公式戦の地上波中継も「間違いなく増える」と見込む。道内のスーパーでは、日本ハム製品のコーナーに「ビッグボスもおすすめ」などと書かれた広告も登場し、新庄効果にあやかる動きも出てきた。

「市民「久しぶりにうきうき」

ここまでの人気の背景には何があるのか。新庄監督のスター性に加え、これまで球団に不満を抱えていたファンの反動もありそうだ。

球団は昨年、不祥事に揺れた。昨年8月に同僚選手への暴力行為で中田翔内野手（32）を巨人にトレードした際、本人に北海道で会見をさせなかったことにファンの批判が集中。さらに球団公式ツイッターの動画に若手選手の肌の色を別の選手がからかう発言が含まれていた。ファンクラブは会員の脱退が相次いだ。

04年の北海道への本拠地移転後、最大の危機をどう乗り切るのか。起死回生の一手が吉村浩チーム統轄本部長が主導した新庄新監督の誕生だった。札幌市民からは「久しぶりにうきうきする」との声も聞かれた。3年連続パ・リーグ5位と成績も低迷する中での明るい話題。球団によるとファンクラブの新規入会者数は前年同時期に比べ約8倍（実数は非公表）に増えた。「一番喜んでいるのは球団」（道内マスコミ関係者）との声もささやかれる。

新庄監督はテレビに引っ張りだこで、ファイターズの広告塔としてすでに大きな成果を上げている。とはいえ勝利を求められるのがプロ野球の世界。2月の春季キャンプから本当の勝負が始まる。とかく「熱しやすく冷めやすい」と言われる道民気質。一過性の人気に終わらないことを願っている。

はなしろ・じゅん▼2004年入社　東京報道センターで政治　経済取材などを経て　18年から運動部で日本ハム担当

新・列島報告62　徳島県
半田病院ランサムウエア攻撃

「災害に備えたが、テロとは」
8万5千人の情報、人質に

石崎　義典
（徳島新聞社美馬支局）

徳島県西部に位置する人口約8200人のつるぎ町。町立半田病院は、13の診療科と120の病床がある地域の中核病院だ。その病院の電子カルテシステムが昨年10月31日未明、身代金要求型ウイルス「ランサムウエア」に攻撃された。

■衆院選投票のさなか、会見

2カ月間にわたり原則予約者の再診に限って診療に応じるなど、最低限の医療態勢での病院運営を強いられた。システムを再構築し、全診療科での通常診療を目指した。

徳島新聞社美馬（みま）支局に一報が入ったのは、衆院選の投票が進む昨年10月31日午後1時半ごろ。「半田病院です。電子カルテシステムが身代金要求型ウイルスのランサムウエアに感染しました。午後4時から記者会見を開きます」。緊張気味の病院担当者の声からは、大変な事態が起こっている様子が伝わってきた。

異変は、その日の午前0時半ごろに起きた。病院内で起動していたプリンター十数台が一斉に英文を出力し始めた。記されていたのは「あなたのデータは暗号化した。身代金を支払わなければデータを公開する」。メインサーバーに加え、バックアップサーバーもウイルスに感染。約8万5千人分の患者情報が見えなくなった。接続していた会計システムも使用不能になった。

病院側は金品の要求には応じず、「災害時の非常事態」として、病院長をトップとする対策本部を設けた。「外来患者は基本的に予約再診のみ」などとする基本方針を決め、紙のカルテで最低限の医療を提供することにした。11月1日、病院入り口に「システム不具合のため予約のみの診療」との張り紙を掲示。知らずに訪れた親子連れは「子どもが風邪をひいたので診てもらおうと思ったのだが。このまま保育園に預けるしかない」と途方に暮れていた。


机を並べて患者らの受け付けをする半田病院職員。聞き取りも行っている（2021年11月26日/徳島県つるぎ町半田/徳島新聞社提供）

待合室に長机を並べた臨時の受付が設置された。「内科」「泌尿器科」「外科」など診療科目ごとに対応。スタッフが総出で「今日は予約がありますか」「この用紙に住所や氏名を書いてください」と声を掛けた。診察室では医師が「いつから受診していますか」などと、患者の基本情報を聞き取ることから始めた。

■被害の実態、詳細に説明

半田病院は一貫して「全国の病院などに同じ被害に遭わないようにしてもらいたいので、混乱する状況や被害実態を広く周知する」と、報道陣に詳細な情報を提供した。

その結果、報道などを通じて半田病院の状況を知った県内の他の公立病院では、サイバー対策を見直すところも出てきた。一例では、5年分の電子カルテ情報をPDFファイル化してUSBに保存。万が一の場合には紙カルテで対応できるようにするなどしている。

半田病院の担当者は「災害発生に備えた対策は十分に取っていた。まさかサイバーテロに見舞われるとは考えもしなかった」。バックアップシステムを常時接続していた点など、対策の甘さを悔やんだ。

電子カルテのような命に関わる情報に関しては完全に外部との接触を遮断し、院内に最高情報セキュリティー責任者（CISO）らを配置するのが理想だ。しかし、大病院でもない限り不可能に近い。

とはいえ、警察庁によると2021年上半期（1～6月）のランサムウエアの被害は61件で、20年下半期21件の約3倍に上る。ウイルスは進化を続け、企業・団体の規模を問わずに被害が発生している。関係者一人一人の危機意識を高める努力が不可欠だ。

いしざき・よしのり▼1997年入社　整理部、小松島支局、販売部、運動部などを経て、2020年4月から現職

私が会ったあの人

連合福岡ユニオン　志水輝美さん

団交の鬼「泣き寝入りにはさせない」

竹次　稔（西日本新聞社）

「『団交の鬼』という連載タイトルとしたいのですが…」。連合福岡ユニオン（福岡市）特別執行委員の志水輝美さん（70）は普段、穏やかで優しい細身の紳士だ。だが、1000を超える組織と団体交渉（以下、団交）で渡り合ってきた全国屈指のすご腕の交渉人。「いいですよ」。私の心配をよそに、いつも通りあっさりと提案を受け入れてもらった。


（2021年5月13日/福岡市/西日本新聞社提供）

1人でも加入できる同ユニオンは1996年の結成。志水さんは設立を主導し、初代書記長に就任した。賃金の未払いや突然の解雇、ハラスメントなどの相談に乗り、団交を通じ、労働者の立場から問題解決に取り組んできた人物だ。志水さんを主人公とした連載「団交の鬼―ブラック企業との闘い」（紙面は2021年9月7日から12回）を担当した。

■ユニオンは私の学校だった

約10年前、社会部で労働問題を担当し、ユニオンとのお付き合いが始まった。多くの労働相談が寄せられるユニオンは、私にとっては学校のようなもの。廃棄物処理会社で、約200万円の赤字を出したとして社長から自腹を強要された男性。ある自治体で、偽装請負で働かされていた女性。ソフトバンクホークスの選手をテレビCMに使うような地元有名企業による残業代の未払い…。ユニオンに駆け込んできた組合員を紹介してもらい、多くの記事を書いた。その後、待遇が悪い非正規公務員や外国人技能実習生などの問題も取材するようになったが、ユニオンが私の労働取材の原点だ。

「ばか！　若者の人生を台無しにしているんだぞ」。志水さんは団交で、鬼に変貌する時がある。福岡県にある車の整備などを行う店。30代男性は先輩からしつこいパワハラに遭っていた。19年7月、仕事中に突然体当たりされた。その後、思い出すと震えが止まらなくなり、心的外傷後ストレス障害（PTSD）の診断を受ける。全国でも珍しいPTSDでの労災認定も認められた。

ところが会社側は、店長が体当たりを目の前で見ていたなど、事情を知っているのにまったくパワハラを認めない。それに怒りを爆発させたのだ。志水さんは今も、労使交渉の最前線に立つ。「謝罪があるまで闘うだけだ。泣き寝入りには絶対にさせない」と、この男性を支え続けている。

■経営者からも感謝の電話

連載のため、かつて志水さんと団交を経験した人たちに取材をお願いした。志水さんを今も慕い、誰もが過去の闘いを振り返る取材を受け入れてくれた。労組を離れても、組合費を支払い続ける人たちが多くいるだけではない。相対した会社側の代理人だった弁護士、経営者団体の元幹部も快く話を聞かせてくれた。「多くのことを勉強させてもらった」。かつて対立した経営者からも、連載を読んで感謝の電話が寄せられていた。

行政による労働相談には限界がある。労使双方の意見を尊重するのはやむを得ない面もあるが、特に立場が弱い非正規労働者が経営側を訴える場合、労働者を守る労組法の枠組みを使わないと、労働環境の改善はなかなか進まない。

そこを地域ユニオンが担ってきた。「平易な言葉で使用者側に説明する。誠実に交渉し、自己批判もする。つまり、真面目であることを大切にしてきた」。志水さんのこの信念を、取材活動でも反すうするようにしている。

（たけつぐ・みのる▼2004年入社　現在　クロスメディア報道部）

次号は熊本日日新聞の坂本尚志さんにバトンが渡ります。坂本さんと竹次さんは福岡勤務時代の取材仲間で、北海道大の先輩・後輩でもあります。

マイBOOK マイPR

『地域発ドキュメンタリーが社会を変える　作り手と映像祭の挑戦』
市村　元（TBS出身）

社会を問う 地方からの生の声

政務活動費の闇に切り込んだ調査報道、大企業の働き方を変えさせたドキュメンタリー、汚染された湖を住民とともに蘇らせた長期のキャンペーン報道、市営射撃場の鉛汚染を告発した第三セクター、沖縄あるいは被災地の小さき民を見つめ続けた静かな告発。40年余の歴史を重ねた「地方の時代」映像祭には毎年全国から〝社会を問う〟多くの映像作品が寄せられます。地域の課題に向き合う制作者の生の声を感じていただければ幸いです。

音好宏氏、「地方の時代」映像祭実行委員会との共編



ナカニシヤ出版
2,750円

『志縁のおんな　もろさわようこさんとわたしたち』
河原　千春編著（信濃毎日新聞社記者）

女性史研究家の半生たどる

信濃毎日新聞くらし面の連載をもとにした単行本です。長野県出身の女性史研究家・もろさわようこさん（96）の半生をたどりながら、いち早く女性の戦争責任を訴え、同時代にウーマンリブを評価した思想の先駆性に迫りました。ジェンダーという概念が一般的になる前から、社会的・文化的に性差別がつくられたことなどを訴えたもろさわさんの文章12編も収録。コロナ禍に揺れる社会について語ったインタビューも掲載しています。



一葉社
3,300円

『日本財団は、いったい何をしているのか　第七巻・コロナ禍とパラリンピック』
鳥海　美朗（産経新聞出身）

見えざる敵との未曽有の闘い

2年以上におよぶ新型コロナウイルス感染症との闘いは、さまざまな社会課題の解決に取り組んできた日本財団にとっても、まさに未曽有の経験だった。もともとは東京2020パラリンピックの支援を通じて障害者スポーツのすばらしさを伝え、共生社会の実現を目指そうと準備を重ねてきた。それが感染症で一転し、患者の宿泊療養施設の設営や無料PCR検査の提供など対コロナ禍の最前線に。闘いはなおも続いた。



木楽舎
1,650円

支局報委員から

「夏冬二刀流」見守り続ける

東京五輪・パラリンピックが閉幕して半年程度というのに、間もなく北京冬季五輪が始まる。「また五輪か」と見る向きもあろうが、降雪地の新聞社に勤務する身としては冬のスポーツの祭典は楽しみなイベントだ。

中でも期待しているのがスノーボードの平野歩夢（あゆむ）選手。新潟県村上市出身だ。村上支局に勤務していた10年ちょっと前、スノーボードやスケートボードが抜群にうまい小学生がいるという話をよく聞いたが、それが平野選手だった。

その後、スノーボードで頭角を現し、2014年のソチ五輪で銀メダルを獲得。種目での最年少メダリストということもあり注目を浴びた。4年後の平昌五輪で再び銀メダルに輝き、一躍時の人となったのは周知の通りだ。

そして東京五輪。スケートボードでの出場という「二刀流」に挑み、見事切符を手にした。メダルには及ばなかったが、異例の「二刀流」で五輪出場を果たしたのは称賛に値しよう。

新潟日報が初めて平野選手を取り上げたのは2011年1月。12歳の時だった。新年企画で「輝くティーンたち　兄弟で冬季五輪狙う」の見出しで、15歳の兄英樹さんとともに掲載した。英樹さんがソチが目標としていたのに対し、その4年後を目指すと今思えば控え目に答えていた。

そんな幼少期から、急カーブの成長曲線を描き、世界のトップに躍り出るまでを弊紙が見守り続けられたのは、地域とともに歩む地方紙だからこそと思う。

東京五輪を終えると早々に北京への挑戦を明言した平野選手。本番でどんな大技を繰り出すのか。投打の「二刀流」で大ブレークした大谷翔平選手ばりの活躍は見られるか。「外交ボイコット」など大会を前に気になる動きもあるが、「夏冬の二刀流」への期待は日増しに高まっている。

新潟日報東京支社次長兼報道部長
諏訪　敬明

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話　和食 3503-2723　洋食 3503-2766・2731

和食　睦月懐石（1/31まで）

前菜：早春豆腐、数の子、松笠床節など　お椀：海老真薯、結び人参など　造り：鮪、鯛皮霜、紋甲烏賊　焼物：鰤錦焼き、金柑蜜煮など　煮物：蕪菁含め煮、筍土佐煮、鰊昆布巻きなど　揚物：あんこうの黄金揚げ、長芋唐揚げなど　食事：信州蕎麦　水菓子：フレッシュゼリー（5,500円）※要予約　（板長：内海圭史）

洋食　季節のおすすめコース（1/28まで）

鴨肉のサラダ仕立て カシスのヴィネグレット、ずわい蟹と蕪のクリームスープ、牛フィレ肉のステーキ、ジャーマンパンケーキとバニラアイス、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス（4,400円）。ランチ、ディナー（土曜日はランチのみ９階レストラン）ともにご利用いただけます。（シェフ：佐藤和治）

予想アンケート、ネット投票もできます

「2022年予想アンケート」の投票用紙を今月号に同封しています。ファクス（03-3503-7271）か郵送で投票してください。または、右記のQRコードからネットでの投票もできます。締め切りは１月31日（月）です。

HP更新情報　https://www.jnpc.or.jp/

■会見詳録　会見の文字記録

●「新型コロナウイルス」⑰感染症対策と憲法問題～その対策に法的根拠はあるか～横大道聡・慶應義塾大学大学院教授（2021.11.12）

１月後半の行事予定（12/27現在）

会場はすべて10階ホール

19㈬	14：00～15：30 「2022年経済見通し」② 白井さゆり　慶應義塾大学教授
20㈭	14：00～15：30 「2022年経済見通し」③ 山口周　独立研究者、著作家
21㈮	13：30～15：00 「2022年経済見通し」④ 小林真一郎　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング主席研究員
24㈪	18：00～19：30 試写会「夢みる小学校」
26㈬	14：00～15：30 「2022年経済見通し」⑤ 柯隆　東京財団政策研究所主席研究員
27㈭	14：00～15：00 工藤泰志　言論NPO代表　記者会見
28㈮	13：00～14：30 「相続登記義務化を考える」 里村美喜夫　日本司法書士会連合会副会長

新しい個人Ｄ会員

川上（かわかみ）　湛永（やすひさ）



1970年朝日新聞入社。横浜支局、東京社会部、読者広報室幹事、関連会社出向など。2003年2月退社。

一昨年、尊敬する朝日OBの柴田鉄治さんが亡くなり、「お前も入れよ」と天の声を聞いた気がしました。仲間入り、よろしく願います。

熊田（くまだ）　安伸（やすのぶ）



1990年NHK入局。沖縄局、報道局社会部、ネットワーク報道部など。2021年7月退局。現在、SlowNewsシニアコンテンツプロデューサー。

「スローニュース」は調査報道に特化した読み放題メディアです。「まだまだ調査報道を書きたい！」という方、ぜひご連絡ください。

佐野（さの）　慎輔（しんすけ）



1990年産経新聞入社。運動部長、取締役サンケイスポーツ代表、特別記者兼論説委員など。2019年退社。現在、尚美学園大学教授。

大学、財団に活動の場を移して１年８カ月。改めて情報の大切さ、情報を獲る難しさを感じています。少しだけ現場に近づければ…。

■訃報

小坂健介さん（信濃毎日新聞社前代表取締役社長、相談役、88歳）が昨年12月10日に、内田優さん（東海テレビ放送代表取締役会長、71歳）が同20日に死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

■法人会員代表変更

北日本新聞社　蒲地誠 代表取締役社長
（旧 駒澤信雄氏）

■会議報告

●第523回企画委員会

（12.10　10階ホール＆オンライン）

2022年の予想アンケート10問を作成した。

出席　藤井委員長、坪井、黒沢、田玉、佐藤、澤田、橋本、猪熊、大内、小竹、辻本、佐々木、森田、杉田、川上、小林、中村、斉川、井上、五味、伊藤、出川、川戸、播摩、小栗、福田、保高、浅井、宮内の各委員。

●第532回会員資格委員会（12.15　会見場）

2022年１月１日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席　前木委員長、吉形、松浦、伊佐治、山本の各委員。

クラブの電話　ダイヤルイン

●和食レストラン（9階）……☎3503-2723　●会員事務……☎3503-2727
●洋食レストラン（10階）……☎3503-2766　●経　　理……☎3503-2728
●貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724　●クラブ行事への申し込み…☎3503-2722
●受　　付……☎3503-2721　●会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況　●法人会員：127社　●基本会員：720人　●個人会員：1,134人
●法人・個人賛助会員：53社・117人　●特別賛助会員：93人
●名誉・功労会員：11人　●学生会員：68人　計：180社・2,143人

会報委員会

委員長＝乾 正人
委　員＝及川 純一　勝田 洋人　鴨下 ひろみ
倉澤 治雄　真田 正明　諏訪 敬明
曽我部 桂　古沢 由紀子　本橋 春紀
山田 道子
（事務局：本庄五月　杉本翔一）
☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：藤井　凱（日本経済新聞社写真映像グループ）



大阪市中央区で観測された部分月食＝2021年11月19日

心惹かれて星月夜

赤銅色の月。原始の人々にとって、ふだんの満ち欠けとは異なる月食は不気味だっただろう。しかし、いまでは小学生でもその理屈を知っている。次に国内で月食が見られるのは、ことし11月8日、皆既月食なのだとも。ながらく信仰、畏怖や詩情の対象だった宇宙は科学の場になった。

でも、ひとはときに無性に夜空に惹かれる。夜の長い冬はとくに。心動かすなにかがあるからだ。

80年代末。第一次インティファーダのさなか、東エルサレムのホテルで、夜半過ぎに急に聖地の星月夜が見たくなった。でもエルサレムは街の光で星の影が薄い。占領地ナンバーのレンタカーを自分で運転して取材していたのが役立った。真夜中のホテルの駐車場から東へ。イエス・キリストが終末の説教をしたと伝えられるオリーブ山に連なる丘陵を越え、昼間なら標高差約一千メートルのヨルダン川渓谷を見下ろせる斜面へ向かう。見上げれば街の光と無縁の漆黒の夜空に無数の宝石が輝く。東方の三博士をイエス生誕の地ベツレヘムに導いた星もその中にあるはずだ。

どの星がそれかは天文学的にはわかっていない。しかし、昼の空と違い、夜の空は宇宙や久遠を意識させる。聖地の星月夜は投石とガス弾の昼間を忘れさせてくれた。

あれから30年、米ソの競争の場だった宇宙に中国が参入し、先陣争いは熾烈だ。月はそのうちスターウォーズの基地にされてしまうのか。

昨年末には日本人初の民間宇宙旅行が実現した。この宇宙旅行を高名なＴＶコメンテーターが「金持ちの道楽」と評して反発を招いたのがネットを騒がせた。

「名月を取ってくれろと泣く子かな」（一茶）の時代には軍拡の宇宙空間もネット空間もなかった。

（萩谷　順）